

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 修辞学

加藤 祥

修辞学を扱った研究は、2023年にも多岐にわたる分野で多くの成果が発表された。特に比喩研究において、直喩論の検討とともに用例の分析例を集めた論文集①半沢幹一編『直喩とは何か：理論検証と実例分析』（ひつじ書房）、直喩を中心とした用例集②中村明『もの・こと・ことばのイメージから引ける比喩の辞典』（東京堂出版）があった。近年は、比喩の用例分析を目指した大規模な用例収集が進んでいる。比喩表現の収集例として③菊地礼「中世期日本語比喩表現の収集の試み」（『言語資源ワークショップ発表論文集』1）、既存用例集の電子化と情報付与例として④加藤祥・浅原正幸『『比喩表現の理論と分類』データの電子化および情報付与』（『国立国語研究所論集』25）、収集の検討例には⑤宮脇星名・安藤一秋「小説テキストからの動詞を用いた直喩表現を含む文の抽出手法の検討」（『情報処理学会第85回全国大会講演論文集 2023（1）』）などの成果が見られた。

種々の修辞技法や表現を取り上げた研究も進む。⑥胡佳芮「流行歌の歌詞における二重表記の用法：主表記と副表記との意味的關係に着目して」（『一橋大学国際教育交流センター紀要』5）、⑦藤原隆史「NPN構文に関するコーパス分析：“arm in arm”に焦点を当てて」（『教育総合研究』7）、⑧近藤芙由「指示詞使用における指示対象の後置現象：実用的後置と修辭的後置を中心に」（『さいたま言語研究』7）、⑨伊藤薫「構成の反復」の並行性についての構文文法的記述の試み」（『Evidence-based Linguistics Workshop 発表論文集』2）、⑩ Debuchi, Eri「The Language of Pain: Eye Ache in Japanese and English」（『神奈川大学言語研究』45）など、意味・文法の観点から精緻な分析があった。主にオノマトペ研究では、⑪山崎英明「子どもの歌におけるオノマトペ抽出の研究～擬情語に焦点をあてて～」（『リカレント研究論集』3）、⑫黄慧「お菓子メーカーの商品パッケージに使われるオノマトペ—お菓子メーカー4社を対象に一」（『語学研究所論集』27）など、分析対象に新分野を扱う傾向が見られた。和歌を対象とした分析、詩を対象とした論考集⑬野沢啓『ことばという戦慄：言語隠喩論の詩的フィールドワーク』（未来社）、⑭富山英俊『比喩と反語 アメリカの詩と批評』（せりか書房）などもあった。

また、修辞を教育や学習指導に援用するための⑮鷲見幸美「小学校低学年教科書に見られる比喩」（『名古屋大学人文科学研究論集』6）、⑯長澤元子「生徒の興味関心に基づいた詩を用いた修辞法の習得について」（『国語探究』3）、⑰廉沢奇「学習者コーパス調査をふまえた日本語学習者の ABAB 型基本オノマトペの使用実態の解明」（『統計数理研究所共同研究リポート』465）などの応用的な研究が進んでいる。

大規模な用例収集と実証的な用例分析に基づき、従来の理論や手法の再検討が進むとともに、多様な修辞技法の研究が深化している。そして、新分野における検証、新たな理論の構築、研究成果の利活用が図られる傾向が見られる。（目白大学）